

月の花挽歌 ～14. 二つの月～

14-4

ホテルオークラ本館6階にある広東料理の店『桃花林』で辰巳と真紀は食事と会話を楽しんでいた。

辰巳太郎はクラブ『こはる』の顧客の一人にすぎなかったが、共通の趣味のチェスで意気投合したこともあって、真紀とは気の置けない間がらだった。

丁度1年前のリーマン破綻が報じられた時分に、真紀は信州の老舗の造り酒屋の娘杜氏から出抜けに打ち明けられた経営危機について、解決策の相談に乗ってもらうキーパーソンとして、灘で『W酒蔵』を経営している辰巳太郎を真っ先に想見していた。

新幹線（あさま）の車内で、急逝した男が社長だった『W酒蔵』の窮状に胸を痛めていた矢先に、電光表示案内板でリーマン破綻を知らされた真紀は、悪い時には悪いことが重なる痛感させられた。

『こはる』もリーマンショックの影響をそこそこに受けたこともあり、『W酒蔵』の件は気に病んでいたが、気がつけば何や彼で辰巳と会えたのは1年経ってからだった。

「電話では話せない相談事とは？」と辰巳は食後に頼んだソーテルヌの貴腐ワインを飲みながら、鷹揚に微笑むと話を先へと促した。

「こちらからお願いをしておいて申し訳ないのですが、ロビーに席を改めていただけませんか？」とロビーの喧噪に紛れた方が話しやすいと思った真紀は、手を合わせて言った。

「別館の1階にあるコーヒーショップにしよう」と真紀の意を反射的に汲んだ辰巳は言ってくれた。

コーヒーショップ『カメラア』の窓際の席に案内された真紀は、夜の日本庭園を横目に見ながら店内の程良い賑わいに紛れ込んだような安堵感を覚えていた。

「ご配慮くださりありがとうございます」と真紀は心からの礼を辰巳に言った。

「……込み入った話のようだね」と辰巳は紅茶にレモンスライスを入れて、二度三度かき回してからスプーンで取り出すと、眩しそうに目を細めて言った。

「有り体にお話させていただきます——」と真紀は辰巳の顔を直視して言う前から、目の前のコーヒーカップに視線を落として直ぐに居住まいを正すと話を続けた。

「信州の『W酒蔵』をご存知ですか？」

「……長野の。うーん、知らないなあー」

「そうですか……」と真紀は意外そうな表情で溜息まじりに言った。

辰巳は真紀の落胆ぶりを可笑しがってから言い聞かせるように言った。

「日本に清酒製造メーカーは千数百社あるんだよ」